

## 「シンフォニック・ジャズを打ち鳴らせ!!」 Strike Up the Symphonic Jazz!!

《キング・オブ・ジャズ》と《ビッグ・バンドの巨人の一人》、その2大巨星に見出された音楽家による

「リフレクションズ」全三楽章 (作曲者 サミー・ネスティコ、生誕 100 年)

「ストライク・アップ・ザ・バンド」 (バンドリーダー:カウント・ベイシー、生誕 120 年、没後 40 年) (編曲者 サミー・ネスティコ、生誕 100 年)

「ラプソディ・イン・ブルー」 (初演より 100 年)

(文責 音楽監督 今井克己)



この第三部の副題、《キング・オブ・ジャズ》とは、今から 100 年以上前の 1920 年から大活躍したジャズ創世記を代表する一人、ポール・ホワイトマン (Paul Whiteman 1890~1967) のことで、もう一人《ビッグ・バンドの巨人の一人》は、スウィング・ジャズの代表的バンドリーダーの一人、カウント・ベイシー (Count Basie 1904~1984) を指しています。1920 年にレコードデビューしたホワイトマンは、今から 100 年前、「シンフォニック・ジャズ」と呼ばれる音楽スタイルをガーシュウィン&グローフェの「ラプソディ・イン・ブルー」によって誕生させ、その後カウント・ベイシー・オーケストラ、後期のアレンジャー、ネスティコなど、多くの作曲・編曲家がそのサウンドを発展させました。ちなみに、ホワイトマンは、彼より若い 1937 年デビューのベイシー・オーケストラの強カリズム・セクション (ピアノ・ベース・ギター・ドラム) を「オール・アメリカン・リズム・セクション」と絶賛していました。第三部は、「シンフォニック・ジャズ」について、ジャズ創世記の 2 大巨星に見出された三人の作曲・編曲家にスポットを当て、時代を遡りながら、その一端をご紹介します。



その後カウント・ベイシー・オーケストラ、後期のアレンジャー、ネスティコなど、多くの作曲・編曲家がそのサウンドを発展させました。ちなみに、ホワイトマンは、彼より若い 1937 年デビューのベイシー・オーケストラの強カリズム・セクション (ピアノ・ベース・ギター・ドラム) を「オール・アメリカン・リズム・セクション」と絶賛していました。第三部は、「シンフォニック・ジャズ」について、ジャズ創世記の 2 大巨星に見出された三人の作曲・編曲家にスポットを当て、時代を遡りながら、その一端をご紹介します。

### 第一曲目 サミー・ネスティコ作曲「リフレクションズ ～ドン・カネヴァに捧げる～」全三楽章

(REFLECTIONS ～A Tribute to Don Caneva～ 2009)

#### 【作曲者について】

サミー・ネスティコ (Sammy Nestico 1924~2021) の名は、吹奏楽ジャンルではあまり知られていないと思いますが、スウィング・ジャズに関わる方々では知らない人はほぼいないでしょう。彼が一躍有名になったのは、カウント・ベイシー・オーケストラのアレンジャーとして初参加した、1968 年発表のアルバム「ベイシー・ストレート・アヘッド」(このアルバムは今もアマチュア・ビッグ・バンド・ジャズメンのバイブルとも) が大ヒットしたことによります。以降、ベイシーが亡くなる 1984 年までネスティコはベイシーのアレンジャーを務め、数々の名曲を残します (1968 年から 1983 年の、収録曲全てアレンジの発売アルバムは何と全 7 枚)。並行して、例えば 1980 年からはワシントン D.C. でアメリカ空軍バンドに編曲家として 15 年間参加し吹奏楽編曲 (リパブリック讃歌など) も携わりました。



#### 【音楽の背景】

かつてアメリカで活躍した著名な吹奏楽指導者がいました。その名はドナルド・カネヴァ (愛称 ドン・カネヴァ 1936~2008)。アメリカ中西部イリノイ州生まれで、1968 年から地元のイリノイ州のジョン・ハーシー高校吹奏楽バンドを初代バンド・ディレクターとして育て上げ (名指揮者アーサー・フィードラーとも共演)、その後、西海岸のカリフォルニア州の社会人吹奏楽、コースタル・コミュニティーズ・コンサート・バンドの音楽監督となり、その活動の豊かさはドキュメンタリー映画『コミュニティ・バンド - 音楽に生きる私たち』に記録され、その映画はエミー賞も獲得しました。この偉大な指導者と生前から関わりがありましたネスティコは、カネヴァへの追悼曲を作曲し、コースタル・バンドにより、翌年 2009 年 10 月 4 日のコンサートで初演されました。



## 【楽曲について】

主としてスウィング・ジャズで活躍していました名アレンジャー・作曲家のネスティコによる、吹奏楽スタイルでの大変珍しいオリジナル楽曲です。スウィングのリズムは、ほぼ第二楽章のみですが、全楽章にわたってジャズコードを中心に、独特のネスティコ・サウンドが吹奏楽全体に行き渡っていて、その豊かさを味わっていただけるのではないのでしょうか。

(この曲について、作曲者による詳細な紹介が見当たりませんので、以下は筆者による想像の域を出ません。)

○**第一楽章 Mio Amico (My Friend)** イタリア語にて「友」と題された4/4拍子で悲しく深く開始されるこの楽章は、徐々に明るさを取り戻していきます。それは、カネヴァの吹奏楽に対する献身的な姿や人柄、それに対する作曲者ネスティコの個人の思いだけでなく、今まで関わりをもった全ての奏者たちの、彼への感謝の気持ちが積み上がり伝播していくような、美しく暖かな響きが広がります。しかし唐突に、深い悲しみを持った響きで曲は閉じられてしまいます。

○**第二楽章 Danielle** ジャズワルツで軽やかに奏でられるこの第二楽章は「ダニエル」。この題名が何を表しているのか明示されておらず、インターネットを駆使するとおぼろげながら辿りつけたようです。その資料はCaneva家の「公式」系図ウェブサイト。ここでは18世紀後半（第一世代）から現在（第九世代）に至る家系（これによるとイタリア、ヴェネト州を起源とするCaneva家は、アメリカや南米、オーストラリアなどへ移民しているようで、第一楽章のタイトルがイタリア語であることも腑に落ちます）が掲載されています。さてDanielleですが、ドン・カネヴァ（第七世代）の娘と記載があり、1989年10月11日生まれ（第八世代）と示されていますので、この曲初演の父カネヴァの追悼コンサートの日はダニエルが20歳の誕生日を迎える1週間前となります。ここから想像するに、この楽章は、ネスティコから残された家族への慈しみを持った音のプレゼントだと想像出来そうです。

○**第三楽章 A Fond Farewell** 訳すと「愛のこもった別れ」。厳かで悲しみもまとった雰囲気音楽が開始されると、そのサウンドの中からトランペット独奏による、カネヴァへの思いを持ちながらも、前へ向く美しい旋律が音楽に力を与えます。それに木管や金管群が答えると、曲は惜別と前向きさ、その両方を抱きながら、美しい響きを持った金管アンサンブル、それに続く木管アンサンブルなどを経て、音楽は、全楽器にて頂点へ達します。

## 第二曲目 ジョージ・ガーシュウィン作曲 サミー・ネスティコ編曲

「ストライク・アップ・ザ・バンド」(STRIKE UP THE BAND 1927) カウント・ベイシー・オーケストラ 1983年版

### 【作曲者について】

ジョージ・ガーシュウィン (George Gershwin 1898~1937) は、ユダヤ系ロシア移民の子として、ニューヨークの下町ブルックリンで生誕。父は職を転々とする貧しい家庭。幼い頃からピアノに興味を持つも友人の家で弾かせてもらうなどでしたので、親は何となく中古のピアノを購入し、あげて独学。次第に難曲も弾けるようになりましたので、母親が本格的に習わせる決心をしたところ、良き師に出会い、レッスン料免除にてピアノを習得。その後15歳の頃、商業高校を中退して楽譜出版社デモンストレーション・ピアニストの職を得、1919年、21歳の時、彼の作曲した「スワニー」をアル・ジョンソンが歌い、大ヒットして人気作曲家になります。(これ以降は、次の第三曲目の紹介へ続きます。)

### 【音楽の背景】

1927年、反戦ミュージカルとして「Strike Up The Band」は登場します。その音楽をガーシュウィンが担当。しかしこのミュージカルはその内容の過激さのためか、観客に受け入れられず打ち切りに。そこで脚本を書き直して、ようやく1930年にブロードウェイ・ミュージカルの仲間入りを果たします。その後、1940年に同名の映画が、舞台版とは全く異なる、青春物語の筋立てで作られヒットし、公開から1年後の1941年、アカデミー賞では3部門でノミネート、その内アカデミー録音賞を受賞。1983年、カウント・ベイシーの亡くなる5ヶ月前に録音した、彼のビッグ・バンド生前最後のアルバム「Fancy Pants」のラスト・ナンバーが、ガーシュウィンを代表する1曲のこの音楽でした。この曲を最後にネスティコもベイシー・オーケストラを離れることとなりました。

### 【楽曲について】

原曲の、こっけいで、疾走感あふれる賑やかさをそのままに、ネスティコによる名アレンジでは、ベイシー・オーケストラのサクソフパート、トランペット&トロンボーン・パート、打楽器・ギター・ベース等のリズム・セクションが縦・横・斜めに精密に編み込まれました。今回はさらにフルートやオーボエ・ファゴット、ホルンやユーフォニューム、テューバなど、吹奏楽の大編成により補強した立体的サウンドをお楽しみください。



### 第三曲目 ジョージ・ガーシュウィン作曲 ファーディ・グローフェ編曲

「ラプソディ・イン・ブルー」(RHAPSODY IN BLUE 1924) ピアルス・吹奏楽編成 1938 年版

#### 【作曲者について】

(前述からの続き)「スワニー」以降、一躍人気作曲家となったガーシュウィンですが、管弦楽法については不慣れであったため、この「ラプソディ・イン・ブルー」作曲時は、本意ながらホワイトマン・バンドのアレンジャー、ファーディ・グローフェに管弦楽版の制作を預けました(後述)。この時、自らの手で出来なかった彼は、管弦楽法を学びたいと強く思い、当時の著名作曲家へ師事を願いますが、これには様々な逸話があります。例えばモーリス・ラヴェル(1875~1937)に管弦楽法の師事をお願いした際には「君は十分にもう一流のガーシュウィンなのだから、教わって二流のラヴェルになることはない」と断られ、ラヴェルから紹介された作曲者で教育者でもあるナディア・ブーランジェ(1887~1979)に願い出た時も、彼の演奏を聴くなり彼女は「クラシックの厳格な和声など指導したら、今のジャズ風スタイルがだめになる」と断られてしまい、管弦楽法は結局、師事することなく独学で得ることとなります。

その後、自身による管弦楽の代表作、交響詩「パリのアメリカ人」(1928)、オペラ「ポギーとベス」(1935)や、多くのジャズメンの指標となった「アイ・ガット・リズム」(1930)など数々の名曲を生みますが、1937年わずか38歳にて脳腫瘍で亡くなりました。

#### 【音楽の背景】

1924年1月、他の仕事で多忙のガーシュウィンが、兄のアイラ・ガーシュウィン(おもに作詞を担当)と息抜きのために訪れたピリヤード場で、翌月の実験的演奏会のために、「(キング・オブ・ジャズの)ポール・ホワイトマンがガーシュウィンに曲を発注した」という新聞記事を目にした事が作曲の発端です。実は全く寝耳に水の彼は、翌日、抗議のためホワイトマンに電話をかけるも、この記事はガーシュウィンを呼びつけるために作った偽記事ということで、「新聞記事になってしまったから作ってくれ」と押し切られてしまい、ガーシュウィンは約2週間で一気にピアノ2台での総譜のみを書き上げました(バンド譜については後述)。そして翌2月、ガーシュウィン自身のピアノ独奏とポール・ホワイトマン・バンドによって、ニューヨーク・エオリアンホールで「新しい音楽の試み」とのコンサートにて歴史的初演がなされました。

#### 【楽曲のもう一人の重要人物、グローフェ】

ファーディ・グローフェ(Ferde Grofé 1892~1972)はニューヨークでクラシック音楽家の両親の下に生まれ、ピアノやヴァイオリンを母から習得します。7歳のころ父親を亡くしますが、その後母親に連れられドイツのライプツィヒへ移住し、ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、作曲を学び、また、バリトンホルン、コルネット、ドラムなど幅広い楽器に堪能となります。このことがのちに管弦楽作曲に役立つこととなりました。14歳のときには家を出て仕事を転々としながら15歳からはダンスバンドに参加するなどのバンド活動を続けていました。1909年からロサンゼルス交響楽団にヴィオラ奏者として10年間務め、その後28歳の頃、1920年からポール・ホワイトマン・バンドのチーフ・アレンジャーに抜擢され何百もの曲に関わり、活躍します。



グローフェは、このような立場でガーシュウィンによるこの楽曲のオーケストレーションを任されることとなります。(ちなみに、ピアノ独奏部のカデンツァは、初演当日も未完であったため、本番において、ガーシュウィン自身の即興アドリブとなりました。)

この後、1932年までホワイトマンの元でアレンジャーを務めますが、その間、1926年にグローフェ最初の主要な組曲「ミシシッピ組曲」(昔、TV番組「アメリカ横断ウルトラクイズ」に一部が使用されていたので、グローフェやこの組曲を知らなくても、曲を聞いたことがある方々は実は多いと思います。)がホワイトマン管弦楽団の演奏で初演され、作曲家としても認められ、また1931年にはグローフェの最も有名な作品「グランド・キャニオン組曲」がホワイトマン管弦楽団の演奏で初演されたことなどもあって、1932年、独立し、その後も指揮者、作曲家、編曲家として活躍し、1972年に80歳にてこの世を去りました。ちなみに、この「ラプソディ・イン・ブルー」について権利関係でガーシュウィン側と争うことも生じましたが、最終的には和解しています。

#### ○初演編成に関して

この音楽の初演時、グローフェ版に基づいたポール・ホワイトマン・オリジナル・ジャズ・バンドの編成は、クラシックの管弦楽編成ではなく、木管3(次を持ち替え):フルート・オーボエ・E♭クラリネット・B♭クラリネット・アルトクラリネット・バスクラリネット・ファゴット・ソプラニーノ・サクソ・ソプラノサクソ・アルトサクソ・テナーサクソ・バリトンサクソ、

金管:ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、チューバ1 打楽器:ドラムス、ティンパニ、パーカッション

鍵盤:ピアノ独奏1、ピアノ1、チェレスタ1 弦楽器:バンジョー1、ヴァイオリン8 というものでした。

## 【楽曲について】

題名のラブソディは「狂詩曲」という、叙事詩や民族音楽的な性格の音楽を表しています。作曲当初は「アメリカン・ラブソディ」としていたのですが、兄アイラの助言で「ラブソディ・イン・ブルー」となりました。ブルーは色名というより、ブルース、ジャズの「ブルーノート」（後述）の意味合いが強いものです。また、このジャズ分野のみでなく、前述のように、ガーシュウインのルーツ、ユダヤ民族音楽の「クレツマー・スケール」（後述）の影響や、当時のジャズ誕生直前の「ラグタイム」、そして南米キューバ発祥のラテン音楽「ソン」などの影響も感じられ、それゆえに、20世紀最大のメロディー・メーカーによって、クラシック、ジャズ、ユダヤ音楽、ラテン音楽など、移民大国の音を混ぜ込んだ、オリジナルの「アメリカの民族音楽」が誕生したと言えるでしょう。

### ○数々の魅力的旋律

この音楽の旋律の一部を挙げると、冒頭のクラリネット独奏による印象的なグリッサンド ※譜例 1 から続く、TVドラマ「のだめカンタービレ」でも印象的に使用された旋律 ※譜例 2 がこの音楽全体にわたり奏でられます。この旋律は下降系のため少し哀愁を持った性格を持ち、また何か懐かしげな雰囲気もあります。これを少し専門的に掘り下げます。

この主題は、彼自身のルーツ、ユダヤ民族音楽の「クレツマー・スケール」（ドから始まる音階の場合、レ $\flat$ 、ミ、ファ、ソ、ラ $\flat$ 、シ $\flat$ ）と、アメリカで生まれた「ブルーノート」（ドから始まる音階の場合、ミ $\flat$ 、ソ $\flat$ 、シ $\flat$ ）を巧みに組み合わせられて生み出されています。また独奏クラリネットに続くホルン・ソリによる、やはり「クレツマー・スケール」と「ブルーノート・スケール」（他のスケール音含む）の組み合わせによる旋律 ※譜例 3 もこのあと何度も登場します。また途中、リズムカルな打楽器や中低音楽器に乗ったトランペット等による軽やかな旋律 ※譜例 4 は、「この音楽の曲想が生まれたのはボストン

行きの汽車の中で、リズムカルな機械音に刺激されて、突

如として曲の構想が最初から最後まで

思い浮かび、楽譜としてすら見えた」と作曲者自身が残していますので、その雰囲気

を表しているのかもしれませんが。さらには

「ラグタイム」的な高音木管によるシン

パーションのリズムをバックにした低音楽器などで奏でられる旋律 ※譜例 5 や、この曲の中、もっとも甘く美しい、やはり「のだめカンタービレ」での印象が心に残る旋律 ※譜例 6 など、豊かなメロディーが散りばめられています。

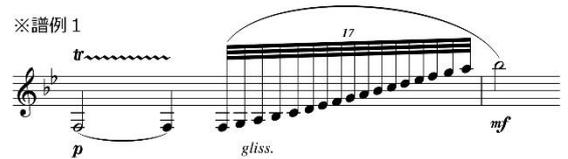
○今回のピアノス版に関して

ジャズ・バンドとピアノ独奏による 1924 年初演での成功に

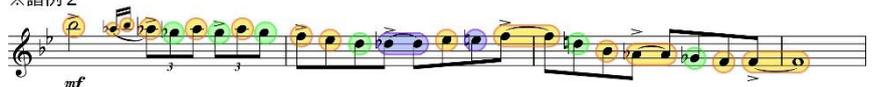
よって 2 年後グローフェによりピアノ独奏+管弦楽編成版が作られ、さらにこのグローフェ稿を基本としたフランク・キャンベル=ワトソンによって 1942 年、ピアノ独奏+管弦楽編成版が製作され、現在、クラシックやジャズの名ピアニスト独奏とオーケストラ編成で取り上げられるものの多くはこのワトソン版です。

ここからは、個人的な考えをもとに述べます。ワトソン版の少し前、1938 年、グローフェによって、今回のピアノスによる吹奏楽版と、同じくピアノスによる管弦楽版が発表されます。いずれも調べる限り、一般的に手に入る録音等が全く見つかりませんし、現在取り上げられることも皆無です。しかしながら、このピアノス版は重要な意味を持っているのではないかと推測します。なぜならガーシュウインは 1937 年、わずか 38 歳にてこの世を去ってしまい、このピアノス版は、その翌年に、初演時の共同制作者といえるグローフェによって発表されたものです。このことから、ピアノスというコンセプトは次のように想像できるのではないのでしょうか。『ガーシュウインがこの世にいなかった』との嘆きを持った深い思いを、『ピアノを失ったサウンド』で示す、との考えではないかと想像しています。現在、このピアノス版を録音、ライブに限らず聴く機会が皆無なのは、残念で仕方ありません。

※譜例 1



※譜例 2



● ユダヤ民族音楽 「クレツマー・スケール」の音

● ジャズ音階の一つ 「ブルーノート」の音

● 上記、2つに共通の音

● 「ブルーノート・スケール」（ブルーノート以外）の音

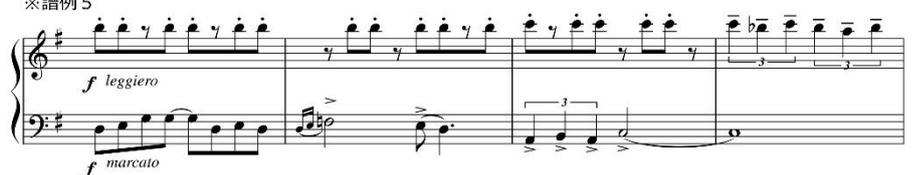
※譜例 3



※譜例 4



※譜例 5



※譜例 6

